

# 学生の読書実態と大学の読書啓発活動



なかやま こうじ  
中山 浩二

聖学院大学学術支援部  
司書課長

しまむら てる  
島村 輝

フェリス女学院大学附属  
図書館長、文学部教授

読書をする学生と  
ほとんどしない学生に二極化

**田上** 生活環境の変化やさまざまなメディアの発達・普及などを背景として、「読書離れ」「活字離れ」が指摘されています。大学生も例外ではなく、全国大学生生活協同組合連合会（以下、全国大学生協連）による2019年の学生生活実態調査によると、1日の平均読書時間は前年に比べて増えているものの、わずか30分であり、さらに、読書時間ゼロが48%と、約半数の学生は読書の習慣がないというショッキングな結果が出ています。読書をする学生としない学生との二極化が進んでいるのではないかと、このコメントも、新聞で読んだことがあります。



司会  
たのうえ まさなる  
田上 雅徳

慶應義塾大学法学部教授、総合政策センター  
広報・情報部門会議  
(大学時報) 委員

みね た ゆういち  
峰田 優一

全国大学生生活協同組合  
連合会広報調査部部长

よこ た ち たえ  
横田 地 妙

創価大学図書館事務室  
副課長

2020年1月29日 日本私立大学連盟会議室にて

こうした状況を受けて、各大学では学生  
が本を手取るきっかけとしてビブリオオパ  
トルやブックハンティング、書評のスヌメ、  
新入生に贈る100冊など、読書啓発に関  
する多種多様な取り組みが行われています。  
本日は、関係する皆様にお集まりいただき、  
それぞれの読書啓発活動の意図や目的、具  
体的な取り組みやその成果・課題などをこ  
紹介いただいで、今後の展開について考え  
る機会としたいと思います。

### 米国で始まった

### 読書運動プロジェクトを導入

島村 私はフェリス女学院大学に赴任して  
10年になりますが、その前の美術系の大学  
に比べて、自分が専門とする文学系の本の  
所蔵はもちろん充実していると思います。  
しかし、実際に学生の指導に当たってみる  
と、充実している本を十分に利用し切れて  
いないように感じるものがあって、それを  
向上させるようなことが何かできないもの  
かと前々から考えておりました。そうした  
ところ、2019年度に図書館長の職に就  
いたため、これを機に従来の取り組みを見

直し、図書館の機能の新しい面も含めて考  
えているところです。

本学の附属図書館では、読書運動プロジェ  
クトに取り組んでいます。これは、元々は  
米国の都市にあった、市民全員の読書運動  
というものが基礎になっていると聞いてい  
ます。シカゴ市で始まり、やがて全米に広  
まって大きな成果を上げたそうです。先日、  
「ニューヨーク公共図書館 エクス・リプリ  
ス」というドキュメンタリー映画が公開さ  
れましたが、ああいった形で市民全員が読  
書を楽しむところから来ていると聞いてお  
ります。

20年くらい続けてきた読書運動プロジェ  
クトの年間テーマの一覧リストを見てみる  
と、プロジェクトの大きな柱として「今年  
の一冊」というテーマを設け、授業で取り  
上げています。また、プロジェクトの一環  
として朗読にも力を入れており、毎年、横  
浜市の港の見える丘公園にある神奈川近代  
文学館で朗読会を開催しています。読書運  
動プロジェクトに参加している学生からな  
る朗読チームを、朗読の専門家が指導して  
おり、朗読会は本年度10回目となります。

朗読チームの学生は卒業後も朗読サークル  
を結成して活動を続けており、学生・卒業  
生が合同で朗読会を開いてきました。

朗読チームは、普段は大学の教室で練習  
をしています。朗読する本を自分たちで決  
め、どのようなパフォーマンスをするか考  
えながらトレーニングしているようです。  
最近では、朗読会の企画や広報も学生が行  
うなど、自主性が発揮されています。

### 図書館や書店のバックヤードを巡る 選書ツアーが好評

**中山** 私は聖学院中学校・高等学校で学校  
司書を17年ほど勤め、聖学院大学に移って  
7年目となります。聖学院大学総合図書館  
の取り組みには、四つの柱があります。

まず、学生協働ということでは、図書館  
の蔵書となる本を学生が選ぶ「学生選書」  
を行っています。桶川市立駅西口図書館と  
丸善書店が一緒になった「OKEGAWA hon  
プラス+」で、図書館や書店のバックヤ  
ードを巡る選書ツアーを開催し、好評でした。  
また、図書館の学生アルバイトが図書のP  
OPを作って館内に展示したり、ボランティア

アの学生サポーター「セラエノ」が手伝っ  
たりしています。

次に、私が大学に来た当初は一部の学科  
しか推薦図書コーナーがなかったので、一  
昨年までに全学科で「学科の100冊」を  
選んでいただきました。さらに、近年は留  
学生が増えているため、日本語科目の教員  
に依頼して、「留学生の100冊」も作りま  
した。これら以外にも、読書レポートや学  
科の書評コンテストなどで教員と連携して  
います。ビブリオバトルは必修科目の授業  
に入っているのも、そこでわれわれが講師  
や司会をすることもあります。

三つ目は展示です。通常の図書館の展示  
のほかに、学生のアルバイトやボランティ  
アが学生展示を担当しています。また、毎  
年開催されている「埼玉県の高校図書館司  
書が選んだイチオシ本」というイベントが、  
図書館総合展の「Library of the Year」で20  
19年のライブラリアンシップ賞に選ばれ  
ましたが、こちらには、本学を卒業して司  
書になった学生が実行委員として参加して  
います。高大接続という観点からこのイベ  
ント展示にも参加をしています。

四つ目はイベントです。先ほどご紹介したビブリオバトルのほかに、今年度から書評コンテストも始めました。図書館主催のフォトコンテストも3回目になります。

毎年11月に、世界の図書館でゲームをするインターナショナル・ゲームズ・ウィークが米国図書館協会などの主導で開催されており、本学でも秋の大学祭のときにこのイベントを開催しています。ゲームといっても電子的なものではなく、ボードゲームがメインで、いわゆるワード系のゲームをプレイします。図書館で開催するので、言葉を使ったゲームや本を小道具として使うゲームを学生が楽しんでいきます。

**田上** いまの学生は本を読まずにゲームばかりしていると言おうと思ったのですが(笑)。では横田地さん、お願いします。

**横田地** 本学では創価大学と創価女子短期大学で読書運動を推進しており、学部生と短大生、そして留学生在が対象です。

読書運動の柱は二つあって、一つは感想文です。専用のウェブサイトから投稿することができます。それを大学院生がウェブ上でチェックし、誤字脱字が多かったり言

い回しがおかしかった場合はいったん提出者に返し、修正・再提出されたものを受理します。本を読むだけでなく、文章力の向上につながる取り組みです。評価に応じたSoka Book Wave(全学読書運動)のポイントが付与され、50ポイント集めると図書カード500円分と交換できます。

もう一つは、読書イベントや、日本語ライティングセンターの文章作成などに関するセミナーへの参加です。これも、参加するとSoka Book Waveのポイントが付与されます。読書イベントは、Soka Book Waveを推進するSoka Reading Projectという学生団体と図書館職員の共同企画で開催されます。2017年度からは日本語ライティングセンターの教員も加わり、教職学協働で行っています。学生だけではなく、教職員や地域の利用者の参加もあります。

読書イベントの内容は、楽しく本を読む機会を増やすこと、主体的・対話的に読書する機会を増やすことを念頭に企画します。2017年度からの主な内容は、アクティブ・ブック・ダイアログ、アニメシオン、グループブックトーク、哲学カフェなどで

ビブリオバトルも開催しています。学生が読書を楽しめるようなイベントを心がけています。

### 読書マラソンで

#### 「4年間で本を100冊読もう」

**田上** 図書館とともに、学生の読書に大きく関わる場所として、全国大学生協連の峰田さん、お願いします。

**峰田** 大学生協は全国で205程の国公私立大学や高等専門学校にあり、それぞれ独立した法人格を持っています。もともと、全国大学生協連の主な目的は共同仕入れにあり、書籍はその中でも大きな割合を占めています。現在は、学生生活実態調査や大学生協の広報活動、大学生協のコンプライアンス対応などが主な活動内容です。全国大学生協連は、それぞれの大学生協が行っている取り組みの中から、全国のほかの大学生協にも広げたほうが良いと思われるものを方針化し活動を進める、ボトムアップ型の組織です。

大学生協が読書推進に関して進めている活動を、三つご紹介します。一つ目は、「4



島村輝氏

年間で本を100冊読もう」というスローガンを掲げている読書マラソンです。文字どおり、卒業までに100冊の読書を提案しており、参加登録をした学生が、読んだ本の感想を専用のカードに記入して大学生協に持って行くと書籍売り場に掲示するとともに、カードの枚数に応じて大学生協で使える割引券や記念品をプレゼントします。この取り組みは2004年に始まって、もう15年以上続いています。

二つ目は、『読書のいずみ』という季刊誌を1970年から年4回発行しています。良書を楽しむ運動として書籍目録的な内容で始まったものが、1980年代頃からは、本を通した、人と人とのコミュニケーション



中山浩氏

ンの促進を目的とする内容になりました。現在は、海外留学記や料理などさまざまなジャンルの書籍を取り上げています。

いま、大学教育が大きく変革する中で、電子書籍を用いて、大学教育のお手伝いをしたいということで進めている取り組みが三つ目となります。既にいくつかの大学の学部や学科では展開されていますが、これは読書推進というよりも、新たな学びの方法のご提案ということになるでしょう。

**時代の変化に応じて  
読書運動の再生を図る取り組み**

**田上** かつて、学生は読書をするものだという前提がありました。それが崩れたか

らこそ、われわれ教職員や大学生協が一生懸命いろいろなアイデアを出しているのだと思います。そこで、もう少し詳しく、ご紹介された取り組みがどのような意図や問題意識の下に始まったのか、その経緯などをおうかがいしたいと思います。

**島村** 20年近く前に、本学は新しい図書館を造りました。大学の規模の割には大きい図書館を建て、蔵書を充実させるだけでなく、そこに学生が集い、使いやすい図書館とすることが必要ではないかという議論が、当時ありました。さまざまに形で本に向かっていくような広がりを作り出すことを考えていたようです。

新しい図書館ができて10年ほどは、講演会や映画会、演奏会などが毎年のように開催されてきました。しかし、ちょうど私が本学に来た頃から、そうした活動が次第に少なくなつたように思います。いろいろな原因があったと思いますが、プロジェクトの創設期に関わった方々の異動や退職などがあってモチベーションが下がり、いわゆるルーティン化したあたりから、パワーダウンしたような気がします。

そこで、時代の変化に応じて再生すべく、私が図書館長になったのを機に新たな試みを始めました。近代において読書とは基本的に個人的な営みであり、図書館はその拠点でしたが、今日としては、他者と情報を共有し発信するような、もう少し広がりがあるものにしてしまうと考えたのです。

先ほどお話がありました。電子書籍やゲームといったさまざまなメディアの变革が進んでいます。図書館もそういったものに目配りをして、図書館の機能の中に有効に組み込んでいくことも、読書運動プロジェクトにおける現在の大きなテーマになっています。



横田地 妙氏

**ビブリオバトルで  
アカデミックスキルの基礎を養う**

**島村**

最近、講演会や映画会、演奏会といったイベントはやや途切れていますが、朗読会と並んで意欲的に取り組んでいるのがPOPコンテストです。推薦したい本を短い文章やイラストで分かりやすく紹介するもので、応募作品は図書館のエントランスに近い目立つ場所に展示します。2019年度は、書店の有隣堂からフェアのお誘いがあり、POP作品が横浜の店舗に展示されました。

また、詩や小説、戯曲のオリジナル作品を募集する創作コンクールも開催していま



峰田 優一氏

す。上位入賞者の作品は製本して本人に贈呈するとともに、図書館の蔵書として保存し、応募者全員に図書カードを進呈します。学生には好評で、多数の応募があります。ほかにも、さまざまな企画の展示や読書運動科目の内容の更新などを考えつつ、進めているところです。

図書館にやってくる学生のモチベーションを高めるために、「個人の読書」から「社会化した読書」に広がっていくような試みを展開してきたという次第です。

**中山** 私が大学に来て7年半ほどになりましたが、その期間の前半で一番大きかったのはビブリオバトルです。2012年度に、まずは職員がビブリオバトルをやってみよ



田上 雅徳氏

うということが始まり、図書館をよく利用する教員が2013年度から日本文化学科の必修授業でビプリオバトルをするところから、連携が始まりました。さらに2014年度からは、全国大学ビプリオバトルの予選会も授業に組み込んでいます。

ビプリオバトルの良い点は、お薦めの本を紹介するために本を読むことです。人前で発表するので、プレゼンテーションやお薦めポイントを言語化して人に伝える能力が求められます。さらに、ビプリオバトルには2〜3分のディスカッションタイムが設けられているので、そこでコミュニケーションが生まれます。最後には投票があって、一番読みたくなった本「チャンプ本」を決めます。さまざまな本との出会いや本を通じた人との出会いがそこにあります。

このように、ビプリオバトルは、大学生として必要な「きちんと読む、話す、聞く」というアカデミックスキルの基礎になるものを養う一助になります。最初は日本文化学科がビプリオバトルを授業に取り入れましたが、いまでは欧米文化学科や政治経済学科でも必修授業に取り入れています。留

学生の授業に取り入れている教員もいます。

これが高じて、私もビプリオバトル普及委員会に加わり、関東地区の普及委員を務めています。その関係から、埼玉県の普及委員といろいろな話す機会も増えました。ビプリオバトルを学内で実施するに当たっては、授業の担当教員と図書館だけではなく学生同士のつながりも生まれ、広がりを見せています。

また、人文学部と図書館がタイアップして、高校生のビプリオバトル・ワークショップも毎年開催しています。高校生と本学の学生が参加するので、ビプリオバトルを通じた高大接続の意味合いもあります。互いの交流を通してお薦めの本を紹介するなど、読書の輪が広がっているようです。

### 全学読書運動によって

### 「読書支援図書館」を目指す

**中山** 先ほどゲームのお話をしましたが、

実物を持ってまいりました。これは「ロボジテン」といって、外来語などのカタカナ語を日本語だけで説明するものです。例えば「バス」なら、「多人数が乗る公共交通機



関の車」とか。これをビプリオバトルの前にアイスブレイクとしてブレイすると、みんな夢中になります。ほかに、古今東西の文学作品のタイトルを組み合わせる「横暴編集長」や、各自が持ち寄った本の中から、お題に合う単語や文章を探し出す「みんなで本をもちよって」なども有名です。

こういった、読書をもっと楽しむためのツールのようなゲームも取り入れて、学生の読書に結び付けようと思っています。

**島村** それらのゲームは一般に市販されているのですか。

**中山** ええ、「みんなで本をもちよって」は、最近ようやく日本語版が出て、図書館界関係者の間には結構広まっています。

**田上** 横田地さん、創価大学ではポイント制などいろいろな工夫なさっていらっしやいます。最初の意図などをご紹介いただけますでしょうか。

**横田地** 本学の Soka Book Wave は2005年にスタートし、本年4月で15年になります。学生のレポート作成能力が落ちていくとか、授業内容の理解度が低下しているといった教員の声を聞いて、学習支援機能としての図書館がそこに関われないかと考えたところから始まりました。大学の教育ビジョンに照らして、やはり学生の読書量が足りないということもありました。

図書館では、1999年から利用者サービスの改善に積極的に取り組んできました。文庫本や新書の充実などを進めて好評を得ていたものの、学生の基礎学力の向上にもっと直結するようなことができないかと模索していました。そうした中で、本学の創立者が図書館を訪れたことから、学生の間で読書の気運が高まったのです。

男子寮では読書杯、学友会では読書カップなどの読書運動を行い、図書館は読書マラソンといって紙のカードに記入して提出するとスタンプを押すということをしていました。それらが2005年に一緒になって Soka Book Wave という全学読書運動が始まり、図書館も「読書支援図書館」を目指していろいろな取り組みを始めました。

Soka Book Wave も最初は非常に盛り上がっていましたが、10年以上経過してピークを過ぎたため、学生に読書を勧める新たな方法を考える必要に迫られました。同じ頃に、日本語ライティングセンターの教員から「読む」ということにもっと力を入れていきたいというお話があり、一緒に読書イベントを行うようになりました。

2017年度からは、教員や Soka Book Wave を推進している学生団体と一緒に読書イベントを開催しています。

**田上** ありがとうございます。先ほど島村先生もおっしゃいましたが、イベントというものはどうしてもルーティン化という問題と切り離せない、そうした点にも触れたいご発言だったと思います。

### 新しい考え方で

### 読書推進を進める時期に来た

**田上** 横田地さんは2005年に問題意識が高まったとおっしゃいましたが、読書マラソンも2004年開始ということで、時代特有の背景があるのかもしれない。全大学生協連で読書マラソンを始められた、そもそも問題意識などをお話しいただけますでしょうか。

**峰田** 生協職員の発案で読書マラソンが始まった動機は、もちろん読書推進ということもありますが、大学生協の店舗では書籍を扱っているの、来店を促進するためのポイントカード的な意図もあったようです。読書マラソンに参加する学生からコメントが寄せられて、それがしだいに読書サークルの活動に発展していきました。2004年の少し前までにこうした取り組みが各大学生協で始まり、2004年に全国的に活動を推進するようになり、2006年から読書マラソンコメント大賞が発表されるようになったのです。

一方、ここ3年ほどの課題としては、先





ほど横田地さんがおっしゃったとおり、読書マラソンに取り組む大学生協の数が停滞状況にあるため、新しい考え方で読書推進を進める時期に來たと受け止めています。

### 教養講座の目的は 日本で一番読書する学生をつくること

**田上** それぞれの読書啓発活動の効果や、今後の展開について、既にお話しいただいた部分もありますが、ご紹介いただけますでしょうか。

**峰田** 学生の変化については、先ほども触れたとおり、読書をする学生のコミュニ

ティーが生まれ、それがサークルとなったところは、現在も読書マラソンなどに旺盛に取り組んでいます。

ただし、振り返ってみると、サークルはできたものの、そういったコミュニティーを維持していくのは困難だった大学生協もあり、いかに形成・維持するかが今後の課題となっています。

先ほど、学生生活実態調査のお話が出ましたが、2017年は読書をしていない学生が53・1%と半分を超えました。2018年は48%と少し改善され、読書の平均時間が前年の23・6分から30分が増えていきます。

この調査は2004年から毎年行っていますが、2018年は読書の平均時間は最良の年ということになりました。新聞記事にあったように、読書をする学生と全くしない学生に二極化しているといえるでしょう。

2019年の調査結果の集計・分析を進めているところですが、どうやら2017年が大学生協の読書離れの底だったようです。

出版社や大学生協以外の書店からは、「大学生が本を読まないなんて世も末だ」と言われることもあります。実感として、本

を読んでいる学生はたくさん読んでいます。大学進学率が上昇して、あまり読まない学生は確かに増えていますが、そういった環境の変化が影響しているのではないのでしょうか。また、経済的な問題はとも大きく、本を買うのが難しくなっているのは間違いないと思います。小説の単行本を買う学生はほとんどおらず、芥川賞を受賞した作品でも、全国の約400店舗で250〜300冊の販売数であり、図書館で借りて読む学生が増えていきます。

いまここで、新たな読書推進の活動を始める必要があるように感じています。

それぞれの大学生協が進めている新しい読書推進活動を二つ、ご紹介いたします。一つは、早稲田大学の「早大生のための教養講座 Resonance」です。これは、日本で一番読書をする学生をつくりたいという目的の下に早稲田大学生協が開催している有料講座であり、学生が実行委員を務めています。「教員との出会い」「先輩との出会い」「同級生との出会い」「無知の知を知る」「新しい自分に出会う」という五つの目標を掲げ、理念に共感した教員が薦める本を紹介

介し、その背景などを語っていただいたあとで、学生のグループと座談会形式で交流するというものです。

もう一つは、新潟大学生協が2019年からリーディングスキル習得講座という有料講座の取り組みを始めました。これは、読解力やリーディングスキルを高めるための講座であり、目的が三つあります。すなわち、「読解力を身に付けること」「主体的に学ぶ方法として読書を体感してもらうこと」「組合員(学生)の学びの成長につながること」というものです。

この講座は、先ほどご紹介した電子書籍を用いて行われています。学生が関心を持って読んだ箇所に電子的な付箋を付けると、それがリアルタイムで共有できる。そういうツールを使って、読解力を高めたり感想を交換したりしています。

これまで、小・中学校でも読書推進に積極的に取り組んできたおかげで、2017年にいったん読書離れは底を打ったように思えます。一方、従来どおりの読書推進運動ではなかなか一年以上にはならないので、幅広いアプローチを試みたいと考えています。

**横田地** Soka Book Waveで、感想文を数多く提出した学生にインタビューしたところ、「読書の習慣がついた」「いままでとは違うジャンルの本を読むようになった」「本を読むだけでなく、アウトプットすることを重視して参加したので、自分が書いた文章を添削してもらえるところがいい」などの声がありました。

また、それまではあまり読書の習慣がなかった学生が、Soka Book Waveに参加したことによって読書量が増えて月に10冊くらい読むようになり、寮の後輩や友人を呼んで定期的に読書会を開いているという話もありました。

Soka Book Waveにはグループでいろいろ話し合いながら行うイベントが多いのですが、学生アンケートでは「自由に忌憚なく意見を言える環境があるので、のびのびと考えることができて楽しかった」「分からなかった内容が、少しは理解できるようになった」といった前向きなコメントが多いので、読書が苦手な学生にも、まずはイベントに参加するよう勧めています。

課題としては、Soka Book Waveに参加

した学生の効果の検証といえますか、例えば学力が向上したといったこと、あるいは図書館の利用頻度との関係性などを検証したいと考えています。

今後も、学生が本に触れる機会を増やすべく、学生と教職員が協働で読書イベントをさらに進め、より多くの学生に参加を促すとともに、これらを図書館のサービスにも生かしていきたいですね。

### 図書館のハードルが下がりが親しみやすくなったという声も

**中山** 私が本学に赴任した当時、図書館の蔵書は研究書などの硬い本が多く、学生が日常的に読むような小説などはあまり購入しない方針だったようです。そのため、読書活動とか読書推進といった取り組みは、今ほど活発でなかったと思います。

そこで、私はもともと学校司書でしたので、たとえライトノベルであっても活字を読むのは良いことだ、本を読むだけでも勉強になるという思いからビブリオバトルや図書の展示などを続け、学生にもう少し読書をさせようと活動してきました。その甲

斐あつてか、学生や職員から、図書館の雰囲気が変わったよねとか親しみやすくなったと言われることもあります。

学生が本を読まなくなったといわれることが多いのですが、活字は読んでいると思います。では何を読んでいるのかというと、例えばネットで読むウェブ小説ですね。紙の媒体では読まないという学生もいるので、学生の読書形態自体が変化していることは事実です。

ビブリオバトルを1年次の必修の授業に取り入れていますが、中には参加したくない学生もいます。しかし、授業で経験したおかげで人前で発表することが全然苦にならなくなったとか、2年次や3年次の学生が授業以外の場でビブリオバトルの予選に参加するといった効果もあります。また、高校生のビブリオバトル・ワークショップを開催していますが、そこで楽しい思いをした学生が後に本学に入学し、図書館でボランティアやアルバイトをするなど、なにかの効果はあるようです。

今後の展開については、やはり学生との連携を考えると、まずは学生が来てくれな

いことには連携しようがないですし、活動の核になるような学生も生まれません。そこで、司書課程を履修している学生に活動に参加してもらえようように、司書課程の教員との連携を始めています。

さらに、近年、留学生が非常に増えているため、図書館が役に立っていることはないかと考えています。「留学生の100冊」を作ったりしていますが、まだまだ不十分な点もあるので、留学生センターとの連携も深めていこうと思つているところです。

### 「本の福袋」が わずか1週間で全て貸し出された

**島村** 2018年までの10年間の図書館の利用状況について、学科別、学年別の統計を取ってみると、確かに右肩下がりであつて、この傾向をなかなか脱し切れていません。私が図書館長になって、まだ1年ですが、この間の取り組みと反響などを少しご紹介いたします。

まず、読書運動プロジェクトの一環として企画展示や創作コンクールを続けてきましたが、新たに「Lucky Bag (本の福袋)」

というものを始めました。これは、図書館運営委員の教員や選書に当たっている図書館職員がそれぞれ本を選び、中身は見えないものの、例えば「シェイクスピアを読んでもみよう」「懐かしいあの頃のことを考えてみよう」といったタイトルがついている福袋を15袋(1袋3冊)作つたところ、わずか1週間で全て貸し出されました。

また、以前は大きな企画展示を年に1〜2回、かなり場所をとつて行つていましたが、これをもっと身軽なものにしました。パネル1枚程度にさまざまな情報を貼り付け、そこで紹介している本も一緒に置き、直接借りることができるようにして、これを年に15回ほどやってみました。企画展示をすればそこに人が集まり、数日の間には置いてあつた本が借り出されてなくなつているという目に見える効果が上がリ、結果が出始めているように思います。

もう一つ、全学的正課授業の読書運動科目で「今年の1冊」を決めていましたが、最近では1冊ではなくテーマを決めるようになり、本もかなり拡散する状況でした。そこで、2019年に私が担当になったのを

機に、やはり1冊に戻しました。学生はあらかじめ課題図書を読んで授業に臨み、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れてディスカッションを行い、さらに図書館で調べるなどして学びを深めるようにします(開講は2020年度前期)。

例えば、2007年に出版された桐野夏生の『メタボラ』という、沖繩を舞台としたエンターテインメント小説です。さまざまなテーマが取り上げられている上に、十章に分かれているので、1回ごとの授業に課題として使いやすい。このように、既存の授業の方法を変える試みをしています。

さらに、図書館の中にラーニングコモンズを設置する予定があり、配置換えや改装を含めて、図書館の大工事の最中です。このラーニングコモンズはリサーチ・ライティング・プレゼンテーションという三つのスキルの向上を目的として掲げており、図書館の中でも書物や資料などを利用したライティングスキルの向上に力を入れていきたいと考えています。

2020年度以降の取り組みとしては、音楽学部の学生が図書館にある楽譜を借り

るときの試奏用に古いピアノが置いてあるのですが、これをよく調べてみたところ、かつて横浜・元町にあったピアノ商會が独自に発注して作らせた珍しい手作りピアノだということが分かりました。そこで、ラーニングコモンズが主導し、音楽学部・文学部・国際交流学部の連携の下に、これを修復するプロジェクトを企画しました。

ピアノが横浜にあったということから横浜学、そして文学、ピアノの修復や演奏といった技術面のことも関わってきます。図書館で調べる、現場に出てフィールドワークをする、ピアノを演奏するというように、図書館やラーニングコモンズが機能する新しい展開を考えているところでです。

**田上** ありがとうございます。大変興味深いお話でした。

### かつてののんびりした時代とは違って 図書館の職員は忙しい

**田上** 私のような図書館に直接関係しない者は、そこで職員が実際に何をしているのかよく知りませんが、こうしてお話をうかがって、学生に本を読んでもらうた

めにいろいろな取り組みをなさっていることが分かりました。だとすると、職員の負担も増えているはずですが、マンパワーの面はどのような状況でしょうか。

**中山** 確かに、図書館の職員は忙しいですね。私の現在の仕事としては、オリエンテーションの対応などがメインになっています。1年次ではOPAC(Online Public Access Catalog: 図書館蔵書検索システム)で蔵書を検索して、大学図書館の本を探せるように。2年次になると、Cinii(Citation Information by NII: NII学術情報ナビゲータ)を使った論文検索ができるように。さらに、ゼミでパワーポイントを使うので、教員からは使い方の講習をするよう図書館に依頼があったり。本を棚に並べたり貸し出し・返却の作業などは、ほとんどしていませんね。

**横田地** 本の貸し出しや返却の対応は、外部に業務委託しています。職員は、中山さんがおっしゃったように図書館のデータベースの講習や、購入する書籍を教員と検討したり、読書運動の企画も進めています。すべき仕事はいろいろあるので、少ない人数で分担して進めています。

**島村** 本学では課長も含めて専任職員が4名、貸し出しや返却の実務は外部委託をお願いしています。先ほどご紹介したプロジェクトの中の企画展示も同じ委託先に選書をしていただき、それをわれわれが企画調整するという形です。専任職員は書架計画や選書といったそれぞれの担当がありますが、委託の方々にも、ただ単に本を並べたり出したりだけではなく、かなり力を発揮していただいています。

仕事は非常に多いものの、よく意見をくみ上げながら、やりがいを持って働いていただけるよう考えています。

**田上** キャンパスにおける情報の一大拠点ですから、図書館と教育活動との連動は、常に検討すべきなのではないでしょうか。

### 学術書中心の大学図書館というイメージを問い直す

**田上** ある大学では、大学生協書籍部がおしゃれな書店のようなレイアウトになっていました。夏休みが近づいてきたら旅行ガイド、例えばトルコの旅行ガイドのすぐ脇に人文系のトルコ史とか、イスラムに関す

る本を並べる。そうした書店は単なる部門分けではなく、テーマで売り場を作っているようですが、私が見た大学生協の書籍部も、そのような店舗レイアウトにすることによって読書に対するモチベーションを高めようと考えたのかもしれない。

**峰田** おっしゃるとおりだと思います。学生生活の中で、関心の対象は時節によって変わるもので、それに応じて専門書や雑誌といった形態で棚を分けるのではなく、学生に対してテーマで提案するという形をとっていくことが重要だと思います。

ただし、先ほどは読書時間の減少が底を打ったのではないかというお話をしましたが、大学生協の書籍部の売り上げは下げ止まっていない状態なので、専属で対応できる正規職員を配置することが次第に困難になっていきます。それに伴って、いまお話があったテーマごとに提案するといった取り組みが難しくなるのであれば、その対応が今後の課題になるでしょう。

**島村** 本学では、ライティングセンターを図書館のラーニングコモンズの中にどう位置付けるか、審議しているところですが、

横田地さんのところでは、ライティングセンターは図書館の中にあるのですか、それとも別の組織なのでしょう。

**横田地** 図書館とは別組織です。総合学習支援センターの中に日本語ライティングセンターがあり、その日本語ライティングセンターと協働で行っています。

**島村** そうしますと、日本語ライティングセンターにも専任の方がいらっしゃって、企画などをなさっているのですか。

**横田地** ええ、そちらの担当は教員なので、教員と連携しています。先生方からいろいろなご提案をいただき、それを図書館の職員と学生、教員で一緒に行っています。

**島村** 中山さんが先ほどご紹介くださったゲームやビデオバトルは、図書館の中で行っていらっしゃいますか。それとも教室などでしょうか。

**中山** 本学では2013年度に補助金を用いてアクティブ・ラーニング室というグループ学修室を整備したので、そうした場所を活用しています。学内のカフェに出張してビデオバトルを行うこともあります。先ほどライティングセンターのお話があ

りましたが、本学には図書館とは別の建物にラーニングセンターがあります。それが、2020年度から図書館を担当する司書課に属することになりました。館内スペースの問題もありますが、そういったところもゆくゆくは図書館の中に取り入れて、図書館棟でワンストップの学修支援ができるような体制を作ろうという計画があります。

**田上** 中山さんの先ほど来のお話は、学術書の書庫としての大学図書館というイメージをそろそろ問い直さなければいけないのではないかという問題提起として私は受け取りました。

従来は大学図書館の選書からもれていた本も受け入れていこうということでしたけれども、そうなると公立図書館などの差別化はどうなるのか。また、その公立図書館では、ベストセラーしか置いていないといった問題も生じています。一方、大学図書館でないといけないような本を用意しておくことも大事ではないかと思えますが、いかがでしょうか。

**中山** 学生向けの軽めの本は、後援会からいただいている予算を用いて、研究書や専

門書を購入する学部学科の図書費とは分けるような工夫をしています。学生選書ツアーで学生に選んでもらう本の予算も後援会費から支出しています。大学図書館なので専門書を入れるだけではなく、こうした後援会の予算で学生に直接還元できるようなところは、そちらを使っています。

いま、学生が多様化し、図書館の役割自体も変化しています。公共図書館の中には、複合施設化して地域のハブになっているところもあるからです。大学図書館も学修だけの場所ではなく、多様な対応ができる、大学のハブのような形になればいいと思っています。軽めの本も入れるようにしています。

**田上** 図書館も姿を変えていく中で、学生の読書の起爆剤となるようなものを提供していくということですね。

**電子書籍で、学生と教員が  
学びの情報を共有する**

**中山** 学生はウェブで小説を読んでいるというお話がありました。私は電子書籍を使った取り組みがとても気になるのですが、その現状や展望について、峰田さんはどうお

考えですか。

**峰田** 全国大学生協連では、電子書籍を大学の講義に活用するDECS (Digital Education Contents Support) 計画という取り組みを進めています。アクティブ・ラーニングの形で、学生と教員がさまざまな学びの情報を共有するものです。学生の勉強時間や、付箋機能などにより、どこで悩んでいるかも分かるようになっていきます。学生は事前に予習をして、そこで特に繰り返し読まれていたり、分からない箇所にマーク



がついていれば、教員側では講義の中でそこを特に深めるような教育をすることができそうです。

現在は、本という媒体を電子化し、インターネットを使ってフィードバックしやすい環境を作り、新しい教育につなげようとしています。将来的には、デジタルの特性を生かして3Dなどを活用する方向に発展できればいいですね。先ほどご紹介した新潟大学生協のリーディングスキル講座では、『未来の年表』という書籍を取り上げ、パソコンやタブレット端末を使ってフィードバックしながら進めています。

「紙の本」にはこだわっていません。医学系などでは電子書籍を活用するところが多いようです。本の量が非常に多いので、電子化することによって学生の負担が減るといったメリットもあります。大学生協もそういう学習環境の変化に対応し、紙か電子書籍かというこだわりは持たずに進めていきたいと思っています。

**田上** 日本では電子書籍端末の普及が意外に進んでいないと聞いたことがあります。かつて、私などは生協の書籍部へ行くため

に大学のキャンパスへ通った記憶があるほど、本が置いてある場所が好きでした。

紙の本にはこだわらない、電子書籍でいいという学生もいますが、電子書籍端末自体の費用も軽視できません。キャンパスの中に書店があることの意味が大きく変わることになり、ちよつと危惧を覚えます。

**峰田** 田上先生がおっしゃるように、大学生協の店舗はキャンパス内にあるので、そこにおける書籍の充実度合いは学生の潜在的な学びの意欲を向上させる点で大変意義があると思っています。

先ほどの学生生活実態調査でも来店回数は増加傾向にあり、そういう空間がいまも求められていることは間違いないでしょう。時間があるときに気軽に立ち寄って、しかし買わずに帰る率も一定程度はあるほうが、「キャンパスの中の本屋さん」としてはいいのかもしれない。あとは、大学生協の事業として持続可能な形をいかに構築するかが課題だと思っています。

**本を読んでいるかいなかで  
学生の間に分断がある**

**島村** 私の専門の日本文学の場合、例えば

ゼミで芥川龍之介を取り上げるとなったら、以前であれば文庫本をテキストとして、その他の参考書なども指定していたので、当然ながら学生は本を手にとっていました。

いまは、指定された本を購入しても、重いからといって持ってこない学生がいたりします。そうすると、芥川龍之介の作品をまだ読んでいない学部生には、インターネット上の電子図書館である青空文庫を利用して「芥川青空文庫読破マラソン」のようなことをさせてみて、そこにある作品を読み切ったら、次は大学の図書館などで全集を読むというように持っていく。入り口としてそうしたフリーのものから入っても、結局それだけでは収まらなくなるといったのが、教えている側の工夫の一つとしてあるのかもしれないと思います。

**田上** 身につまされますね(笑)。一日の中で文字を目にしている時間は、SNSなどもあって、私よりもいまの学生のほうが長いかもしれません。島村先生がおっしゃったように、そういう現実からスタートして図書館や書店へという流れを作ってゆくべ

きなのでしよう。

ところで、本を読んでいる学生とそうでない学生との間で分断が生じている可能性があります。われわれ教員もゼミなどを通じて手助けすべきかもしれません、本を読んでいる人が読んでいない人に紹介するなどの交流がもっとあるべきでしょうね。そうすれば、読んでいる人も新たな読み方に行き着くかもしれません。

### 学生に寄り添う形で 読書支援を考える

**峰田** 学生の二極化や分断というお話がありました。読書推進をより強めていくのであれば、読んでいない人にどうやって読んでいただくかがポイントになると思います。大学生協ではさまざまな事業や活動を行っています。その経験からすると、学生が学生に伝えるのが一番効果的です。読書推進の取り組みに、運営者として学生が関わっているかどうか、運動の推進力の点に大きく影響してきます。

読書推進のイベントに学生がどのように関わっているか。また、学生の卒業によっ

て、次の学生に伝えて育てるという点について、どのように工夫なさっているか、ぜひおうかがいしたいと思います。

**中山** それはまさに本学の課題でもあります。図書館ボランティアの中心メンバーが卒業し、ちょうどいま大変な状況にあります。まだ組織化されておらず、個に頼る部分が多いのですが、本学は学生数がそれほど多くはないので苦慮しています。

**島村** 個別という面では、朗読会は先輩から後輩へと伝わっています。POPコンテストや創作コンクールは、今年は2席だったから来年は1席を取ってやろうと、いつか参加してくる学生がいます。

本学では、さまざまな企画の運営に学生が加わるのはまだ先だと思えます。ラーニングコモンズを作るために多くの大学を見学させていただきましたが、選書指導やライティング指導に学生や大学院生が加わって、企画をしたり相談に乗ったりしているところもありました。そういう形も、本学ではこれから考えるべき課題だと思えます。

**田上** 運営する学生に頼りすぎると、卒業

に伴う代替わりという問題が生じます。継続性があるって期待できるかもしれないと思ったのは、先ほど出た、バックヤードツアールなどで書店と提携する取り組みです。書店は持続します。学生が入れ替わっても、「今年も来たね」といいながら、「本のプロ」が読書のきっかけを学生に提供できる。いまの学生なら、インターンの感覚でこれに臨めるでしょう。地元の本店との連携は大事です。

本日はいろいろなお話をいただきましたが、学生の現状を認識し、その時代的な背景や理由を踏まえた上で、学生にどう読書に取り組んでもらうか、彼ら彼女らに寄り添う形で読書支援を考えていらっしやることとが分かりました。

また、地元との連携という言葉が出ましたが、読書推進は最終的に高大連携や地域との連携の起爆剤になり得るような、非常に可能性に満ちた論点であることも確認できたかと思えます。

ありがとうございます。